

かめ がめ
甕々のための記述

『甕々の声』

企画 西田雅希

アーティスト 黒川岳

オンライン・アートプロジェクト「AICHI⇔ONLINE」

企画・制作:SAAC[Sustainable Arts Activity Cooperative]

主催:愛知県(文化芸術活動緊急支援金事業/アーティスト等緊急支援事業)

ART PROJECT AICHI⇔ONLINE SAAC
SUSTAINABLE ARTS ACTIVITY COOPERATIVE

甕々についての断片的な知識と、彼らの声、 そして Void と Volume について

甕、と聞くと、はじめに浮かぶイメージはどのようなものだろうか。

味噌に梅干し、ぬか漬け、焼酎や梅酒などを仕込む小ぶりのものから、米や穀類を貯蔵するためのもの、水道のなかった時代はどの家庭にもあった大きな水甕まで、世の大半の人は日常の（それも、ひと昔、ふた昔前の）生活と結びついたものを連想するだろう。

しかし、甕とひとくちに言っても、その様相は実に豊かだ。

サイズはさまざま、一般家庭の台所に置くようなものから、大人がすっぽり入ってしまう、首から下のほとんどの部分を地面に埋めて使うような巨大なものまである。

『甕々の声』に登場する甕たちは、すべてこの「巨大」の部類に属すが、こういった大甕の使われ方はとくに多様だ。江戸時代には旗本・御家人から藩主クラスに至るまで、武士階級の人々が入った「甕棺」つまり棺としても使われたし（フルフラットに永眠できる棺に入るのは、昭和に入るまでごくごく限られた層だけの贅沢だった）、近代には、医療用の劇薬や燃料などを入れるための耐酸性の甕も生産されている。展示に出ている白い甕たちはこのタイプで、太平洋戦争末期にB-29迎撃のため開発された幻のロケット戦闘機「秋水（しゅうすい）」の液体燃料製造・保存容器として常滑で作られたものだ。この耐酸坩堝は通称「呂号甕」とよばれ、伊奈製陶（INAX→現LIXIL）が、軍命を受け他の多くの仕事を中断し、全力投球で開発製作した。しかし結局、秋水は実用化されないまま終戦を迎えたので、戦闘機同様、その燃料のための甕であった呂号も、一度も日の目を見ないまま無用の長物と化してしまった。新開発の期待の星から、一夜にして宙ぶらりんの用なしへと転落してしまった無数の甕たち。それらのほとんどは時を経てだんだんと廃棄されていったが、常滑を歩いていると、いまだ手持ち無沙汰に街なかでゴロゴロしているものに出会うこともある。

この呂号のように用途がはっきりとわかっている甕はごく例外的なもので、大半は、何らかの容器であることは確かでありながら、元の用途は不明な場合がほとんどなのだそう。たいていは、長い年月のなかでいろいろなものに転用されていくという。たとえば平安時代に作られた大甕ともなると、水を入れて使われた時期もあれば、染料を入れていた時期もあるかもしれないし、またある時には、もしかしてもしかすると、甕棺として使われた可能性もゼロとはいえない・・・？そう考えると、急にそわそわしてしまう。

また、何かを入れるものという本来の用途を越え、甕がもつ空洞を活かした意外な使われ方をする大甕もある。有名な例としては水琴窟が挙げられるだろう。日本庭園などで、手水鉢から地中に埋めた甕の中に水を落としてその反響音を楽しむ仕掛けで、これには常滑焼の大甕がよく使われてきた。さらに、ある種よりコンセプト的な使い方に、甕を床下に音響増幅装置として仕込む手法がある。たとえば寺院では僧侶が読経をする場所の下に、能舞台では観客席に向けて、甕の反響で声が増幅される効果をねらって設置される。

『甕々の声』での我々の態度は、この「容れ物に何も入れない」甕との関わり方と密接である。空洞と音の関係。とはいえ、空洞と反響を利用してこちらの届けたい音を増幅させる、音響装置としてのアプローチとは逆に、空洞そのものが受け取っている音、その内部で響かせている音に、こちらから静かに近寄ろうとするのが今回の試みだ。甕々の声を聴こうとすること。寄り添って体験してみようとする。いつも何かを受け容れてきた彼ら自身の声は、叫びは、一体どのようなものなのか。

Void（空洞）とVolume（容量、音量）。オンサイトとオンラインとを往き来し、さまざまな切り口から、角度から、目線から、甕々とその声のvoidとvolumeとの出会いを味わってもらおうと、できる限り多様な視点を用意したつもりだ。どの部分とどの順番で出会うかによって、その人それぞれの最終的な作品体験は異なるものになるだろう。

甕々の空洞とその声とに向き合っていると、自らの内部にある空洞にも意識が引き込まれてゆく。身体的にも、心理的にも。これは、このコロナ禍において、大小の差はあれ誰もの人生に突如出現した空洞ともまた、改めて向き合ってみることに繋がる。そして、触れない中でいかに、何に、どのように触れる体験ができるかを考えることも。

『甕々の声』出展 甕・土管リスト

所蔵：とこなめ陶の森

*Edo: 1603-1868 Taisho: 1912-1926 Showa: 1926-1989

		高さ Height (mm)	口径 Opening diameter (mm)	最大直径 Maximum diameter (mm)	底面直径 Base diameter (mm)	年代 Period*	元の用途 Original usage
1	甕 Jar	1430	1090	1160	830	1945	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
2	甕 Jar	1410	630	980	350	昭和時代初期 Early Showa era	貯蔵容器 Storage container
3	甕 Jar	1430	1070	1180	840	1945	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
4	甕 Jar	1240	450	930	630	昭和20年代 1945-1955	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
5	甕 Jar	1180	610	830	340	昭和時代初期 Early Showa era	貯蔵容器 Storage container
6	甕 Jar	1360	580	860	290	昭和時代初期 Early Showa era	貯蔵容器 Storage container
7	甕 Jar	1300	740	980	630	1945	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
8	甕 Jar	1220	460	1000	720	1945	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
9	甕 Jar	1220	480	1000	720	1945	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
10	甕 Jar	1220	470	970	720	1945	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
11	甕 Jar	1070	720	750	270	大正時代 Taisho era	貯蔵容器 Storage container
12	甕 Jar	1110	840	890	210	江戸時代 Edo era	貯蔵容器 Storage container
13	甕 Jar	1300	730	1010	630	1945	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
14	甕 Jar	1310	610	1010	650	1945	耐酸炆器 Acid resistant stoneware
15	土管 Clay pipe	820	970	880	820	大正時代 Taisho era	汚水処理 Sewage
16	土管 Clay pipe	820	970	880	820	大正時代 Taisho era	汚水処理 Sewage
17	土管 Clay pipe	820	970	880	820	大正時代 Taisho era	汚水処理 Sewage
18	土管 Clay pipe	820	970	880	820	大正時代 Taisho era	汚水処理 Sewage
19	土管 Clay pipe	820	970	880	820	大正時代 Taisho era	汚水処理 Sewage
20	土管 Clay pipe	820	970	880	820	大正時代 Taisho era	汚水処理 Sewage

※ 15～20の土管の台：電纜管（でんらんかん）。電話線等を地中に埋める際、腐食から保護するために使われている電線・ケーブル専用の土管

『甕々の声』 展示会場における甕・土管の配置図

会場：アートラボあいち

